

臨床レポート

犬の肝細胞癌の1例

森川史人

要約

食欲、嘔吐、元気消失があるとの主訴で来院した雑種犬において、腹腔内に腫瘍を触知、試験的開腹術により肝臓左葉に腫瘍が認められた。肝臓左葉の全摘出術を実施したところ、臨床症状は改善した。肝臓腫瘍は病理組織学的に肝細胞癌と診断された。

キーワード：犬，肝細胞癌

犬の肝臓原発腫瘍の発生は少なく、腫瘍全体の0.8～2.3%であり、肝細胞癌の発生は全腫瘍の1%以下とされている [1]。肝細胞癌の発生状況については近年の報告はなく、腫瘍発生の平均年齢は10～11歳、雄のほうが雌より発生頻度が高く、犬種による差はないとされている。今回犬の肝細胞癌の症例に遭遇したため、その概要を報告する。

症例

症例は雑種犬，雌，10歳，体重21kgであった。以前にフィラリアに感染していたが、現在は投薬による予防を行っているものの、混合ワクチンは未接種とのことであった。今朝から嘔吐、食欲不振、元気消失との主訴で来院した。

治療と経過

初診時には犬は背彎姿勢をとっており、腹部に大きな腫瘍が触診された。超音波検査では、約10×10cmの腫瘍が確認された。血液検査では、貧血 (RBC 338万/ μ l, Ht 28, Hgb 7.0g/dl)

が認められ、肝酵素の値も軒並み上昇していた (ALT>1000U/l, GGT 238U/l, ALP>3500U/l)。そこで飼い主の承諾を得て、第2病日に試験的開腹を行った。手術は正中～左腹壁を切開して開腹した。腫瘍は腸管の一部を巻き込んで腹腔内を占拠しており、肝臓左葉の腫瘍であることが確認された。一部自壊、破裂しており腹腔内出血を伴っていた (図1)。腸管との癒着部分を剥離、肝臓左葉を全摘出した。術中の所見では右葉には異常は認められなかったものの、脾臓の一部が退色しており、転移を疑わせる所見も認められた。術後翌日からすぐに食欲、元気も回復、第5病日には退院した。第9病日の血液検査結果では、貧血 (RBC 329万/ μ l, Ht 25, Hgb 6.4g/dl) が認められ、肝酵素もまだ高値 (ALT>1000U/l, GGT 102U/l, ALP>3500U/l) を示していた。3ヵ月後の検診時は食欲、元気もあり、貧血 (RBC 496万/ μ l, Ht 40, Hgb 9.4g/dl) も軽度改善され、肝酵素 (ALT 109U/l, GGT 9 U/l, ALP 1485U/l) の値も落ち着いてきていた。摘出した肝臓腫瘍

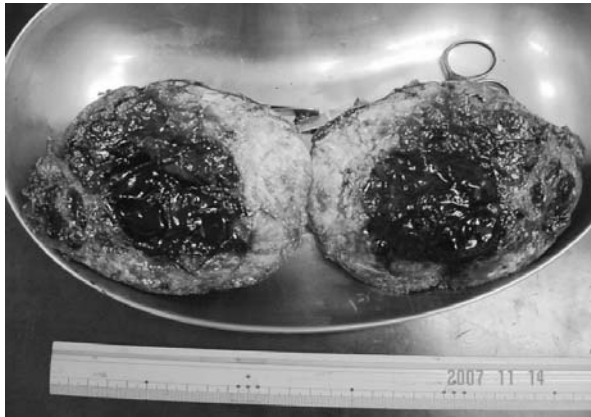


図1 摘出された肝臓腫瘍

の病理組織学的検査では正常肝細胞構築は破壊され、肝細胞に類似する腫瘍細胞が増殖していることから肝細胞癌と診断された。腫瘍細胞の異型性は弱く高分化型に分類されるものであった。

考 察

原発性の肝臓腫瘍は多くはなく0.6～1.5%というデータもある [2]。原発性悪性肝臓腫瘍は形態学的にマス状、結節状およびび漫性の3型に分けられる。マス状型は肝臓の一葉に限局される巨大な孤立性のマスで、結節状型は多病巣性でいくつかの肝葉におよぶもの、び漫性型はすべての肝葉におよぶ多病巣性または複数の小結節が融合したもの、あるいはび漫性に肝臓実質が消失したもので腫瘍疾患の最終段階に相当するものと考えられる。マス状型肝細胞癌は外科的に完全切除が可能であり、予後は良好である。これとは対照的に肝細胞癌以外の悪性腫瘍の犬の予後は不良である [2]。

肝細胞癌は犬の原発性肝臓腫瘍の中でもっとも多く見られる腫瘍で、肝臓腫瘍の50%にもなる。肝細胞癌の53～83%はマス状型で16～25%は結節状型、最大19%がび漫性型である [2]。マス状型肝細胞癌の犬の2/3以上において肝臓左葉が侵される。またその転移率は0～37%であり、肝葉切除術が推奨されている [2]。マス状型肝細胞癌の犬40例における研究で腫瘍は左側に多く、外科切除において生存期間の中央値が1,460日以上におよぶ延命がもたらされ、

唯一の予後決定因子は腫瘍の局在部位であることがわかっている [3]。矢吹ら [4] の犬25頭における肝細胞癌の症例でも中央生存期間は1,522日で、完全肝葉切除が可能であった場合は長期の延命が期待されると考えられる。

マス状型肝細胞癌の犬では再発と転移疾患はまれであり、死亡例の多くは肝臓細胞癌とは無関係である [2]。

今回の症例は典型的な肝臓左葉のマス状型肝細胞癌であり、消化管の一部を巻き込んでいたものの完全切除が可能であったため予後が良好だったものと思われる。また矢吹ら [4] によるとマス状型肝細胞癌の症例25頭でALTの上昇が全頭に、ALPの上昇が24頭で認められている。この症例も毎年フィラリア予防の時期に健康診断をおこなっており、3年ほど前からALT等の肝酵素の値が上昇してきていたため、なんらかの肝疾患を抱えている可能性が示唆されていた。飼い主には話をしていたのだが、もっと積極的に肝臓の超音波検査なりを強く勧めていれば肝細胞癌の早期発見につながっていたのではないかと思われる。矢吹ら [4] の症例でも症例の20%近くが健康診断時に発見されており定期的な健康診断の重要性を再認識した。

引用文献

- [1] 中山裕之：犬の肝臓腫瘍の発生状況と病理，病体，SURGEON24，6－7，インターズー，東京（2000）
- [2] Liptak JM, Dernell WS, Withrow SJ：Liver tumors in cats and dogs, Compendium, 26, 50（2004）
- [3] Liptak JM, Dernell WS, Monnet E,etal.：Massive hepatocellular carcinoma：Surgical outcome in 40 dogs. Proc Vet Cancer Soc Conf, 22, 32（2002）
- [4] 矢吹 淳，小出和欣，小出由起子：外科治療を行った腫瘍型肝細胞癌犬25症例の臨床検査所見と治療成績，第29回動物臨床医学会年次大会，119－122，動物臨床医学会，鳥取（2008）